

科学・技術の世界

数式処理システムによる新時代の数学

算術幾何平均に関する最近の研究

行木 孝夫、松本 圭司 (北大 理 数学)

第14回, 2018 January 22

算術幾何平均とは

$m_1(x, y)$ を x, y の算術平均 (相加平均, the arithmetic mean of x, y) とする. つまり

$$m_1(x, y) = \frac{x + y}{2}.$$

$m_2(x, y)$ を x, y の幾何平均 (相乗平均, the geometric mean of x, y) とする. つまり

$$m_2(x, y) = \sqrt{xy}.$$

2つの正数 x, y ($x \geq y$) に対して, 数列 $\{x_n\}, \{y_n\}$ を $x_0 = x, y_0 = y$ および連立漸化式

$$x_{n+1} = m_1(x_n, y_n) = \frac{x_n + y_n}{2}, \quad y_{n+1} = m_2(x_n, y_n) = \sqrt{x_n y_n}$$

で定義する.

Proposition 1 数列 $\{x_n\}, \{y_n\}$ は収束し, $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \lim_{n \rightarrow \infty} y_n$.

Proof. 平均の性質および (相加平均) \geq (相乗平均) より

$$y = y_0 \leq y_1 = \sqrt{x_0 y_0} \leq \frac{x_0 + y_0}{2} = x_1 \leq x_0 = x.$$

一般に $y_n \leq x_n$ ならば, $y_n \leq y_{n+1} \leq x_{n+1} \leq x_n$ が成立. 従って,

$$y_0 \leq y_1 \leq \cdots \leq y_n \leq x_n \leq \cdots \leq x_1 \leq x_0$$

をみだし, $\{y_n\}$ は上に有界な単調増加列, $\{x_n\}$ は下に有界な単調減少列なので, これらの数列は収束する.

$\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \alpha, \lim_{n \rightarrow \infty} y_n = \beta$ とおき, 等式 $x_{n+1} = \frac{x_n + y_n}{2}$ に対して $n \rightarrow \infty$ とすると,

$$\alpha = \lim_{n \rightarrow \infty} x_{n+1} = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{x_n + y_n}{2} = \frac{\alpha + \beta}{2}$$

となるので, $\alpha = \beta$ となる. □

Definition 1 (参考文献 [1], p.9,10 例3) 正数 x, y ($x \geq y$) に対して, 数列 $\{x_n\}, \{y_n\}$ の共通極限

$$\alpha = \lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \lim_{n \rightarrow \infty} y_n$$

を x, y の算術幾何平均 (*the arithmetic-geometric mean of x, y*) といい, $\text{agm}(x, y)$ で表す.

算術幾何平均に関する研究史その1 (高木貞治著 近世数学史談より抜粋)

ガウス (Gauss C.F.) は 1799年 (「日記」 5月30日) に 1 と $\sqrt{2}$ との算術幾何平均 $\text{agm}(\sqrt{2}, 1)$ が $\frac{\pi}{2\omega}$ と小数第11位まで一致することを発見した. ここで ω は

$$\omega = \int_0^1 \frac{dx}{\sqrt{1-x^4}}.$$

もしも実際 $\text{agm}(\sqrt{2}, 1) = \frac{\pi}{2\omega}$ なることが証明されるならば, 「確かに解析の新分野がひらかれるであろう」とガウスは考えている.

このような事実を発見できるのは、天才にしかできないこと。その天才をもつてしても、膨大な計算を行い多くの時間を費やしているはず。しかし我々は Maxima を使うと数分でこの事実を確かめることができる。

```
m1(x,y):=(x+y)/2; m2(x,y):=sqrt(x*y);
agm(x,y):=block([i,xx,yy],array(xx,10),array(yy,10),
xx[0]:x,yy[0]:y,
for i from 0 thru 9 do
(xx[i+1]:bfloat(m1(xx[i],yy[i])),
yy[i+1]:bfloat(m2(xx[i],yy[i])),
print(i,xx[i],yy[i],xx[i]-yy[i])),
return(xx[10]));
```

```
fpprec: 30;
a0:sqrt(2); b0:1;
Gagm:agm(a0,b0);
omega:integrate(1/sqrt(1-x^4),x,0,1);
bfloat(%pi/(2*omega));
bfloat(Gagm-%pi/(2*omega));
```

近世数学史談には

$$\int_0^1 \frac{dx}{\sqrt{1-x^4}} = \int_0^\pi \frac{d\varphi}{\sqrt{1-\frac{1}{2}\sin^2\varphi}}$$

とあるが、これは間違い。右辺の積分に $1/(2\sqrt{2})$ をかけないといけない。
正しくは

$$\int_0^1 \frac{dx}{\sqrt{1-x^4}} = \int_0^\pi \frac{d\varphi}{2\sqrt{2-\sin^2\varphi}}.$$

```
float(integrate(1/sqrt(1-x^4),x,0,1));  
integrate(1/sqrt(1-sin(y)^2/2),y,0,%pi);  
romberg(1/sqrt(1-sin(y)^2/2),y,0,%pi);  
romberg(1/(2*sqrt(2-sin(y)^2)),y,0,%pi);
```

Maxima において romberg は Riemann 和の近似計算を実行する。

算術幾何平均の計算では、多くの項の計算は必要なくて、 x_3, y_3 まで求めればよい。平方根の計算が大変そうであるが、後で紹介する算術調和平均を用いると比較的に計算できる。

問題は広義積分の計算にある。この積分は楕円積分とよばれていて、当時は原始関数を見つけて値を求める手段はなかった。オイラー (L. Euler) の先行研究を勉強していたようだ。ベータ関数をガンマ関数で表示して、ガンマ関数の公式を利用したものと思われる。

ガウスは「解析の新分野」と思える新しい理論として楕円関数論、保形関数論を構築している。

算術幾何平均に関する研究史その2

一般の正数 a, b ($a > b$) に対する $\text{agm}(a, b)$ に対する公式をガウスは構成している。ガウスの超幾何級数 (the hypergeometric series)

$$F(\alpha, \beta, \gamma; z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(\alpha, n)(\beta, n)}{(\gamma, n)n!} z^n$$

を用いて表示できる。ここで z が主変数で、 α, β, γ はパラメーターで $\gamma \neq 0, -1, -2, \dots$ をみたし、 $(\alpha, n) = \overbrace{\alpha \cdot (\alpha + 1) \cdots (\alpha + n - 1)}^n$ とする。この級数は $|z| < 1$ において絶対収束している。

Theorem 1

$$\text{agm}(a, b) = \frac{a}{F\left(\frac{1}{2}, \frac{1}{2}, 1; 1 - \frac{b^2}{a^2}\right)}.$$

Maxima には, 超幾何級数が用意されている.

```
Agm(x,y):=bfloat(x/hypergeometric([1/2,1/2],[1],1-(y/x)^2));
```

```
Agm(sqrt(2),1);
```

```
Gagm;
```

```
Agm(sqrt(2),1)-Gagm;
```

```
agm(19,7);
```

```
Agm(19,7);
```

```
agm(218,122);
```

```
Agm(218,122);
```

Theorem 1 の証明に利用する事実:

Theorem 2 (不変原理) $m_1(x, y), m_2(x, y)$ が $D = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x, y > 0\}$ 上の連続関数で,

$$x \neq y \Rightarrow \min(x, y) < m_1(x, y), m_2(x, y) < \max(x, y)$$

をみたすとする. 数列 $\{x_n\}, \{y_n\}$ を初項 $x_0 = x, y_0 = y$ を正数で与え, 漸化式

$$x_{n+1} = m_1(x_n, y_n), \quad y_{n+1} = m_2(x_n, y_n),$$

で定める. $\{x_n\}, \{y_n\}$ は $n \rightarrow \infty$ のとき同じ値に収束し, その極限值は D 上の連続関数 $\mu(x, y)$ で

$$(1) \quad \mu(x, x) = x, \quad \mu(m_1(x, y), m_2(x, y)) = \mu(x, y)$$

をみたす関数を用いて, $\mu(x, y)$ で表示できる.

Proof. 同一極限の存在 $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \lim_{n \rightarrow \infty} y_n = \alpha$ を仮定する. 関数 μ の性質より

$$\begin{aligned}\mu(x_0, y_0) &= \mu(m_1(x_0, y_0), m_2(x_0, y_0)) = \mu(x_1, y_1) \\ &= \mu(m_1(x_1, y_1), m_2(x_1, y_1)) = \mu(x_2, y_2) \\ &= \dots = \mu(x_n, y_n)\end{aligned}$$

$n \rightarrow \infty$ とすると $x_n, y_n \rightarrow \alpha$ であり, 関数 μ の連続性より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \mu(x_n, y_n) = \mu\left(\lim_{n \rightarrow \infty} x_n, \lim_{n \rightarrow \infty} y_n\right) = \mu(\alpha, \alpha) = \alpha$$

が得られる. □

Theorem 1 を証明するには, (1) をみたす関数を見つけてしまえばよい.

Theorem 3 (2次変換公式)

$$(1+z)^{2\alpha} F\left(\alpha, \alpha - \beta + \frac{1}{2}, \beta + \frac{1}{2}; z^2\right) = F\left(\alpha, \beta, 2\beta; \frac{4z}{(1+z)^2}\right).$$

Maxima で成立しているか確認してみよう.

```
z0:2/11; a1:%pi; be:sin(2);
sahen:bfloat((1+z0)^(2*a1)
            *hypergeometric([a1,a1-be+1/2],[be+1/2],z0^2));
uhen:bfloat(hypergeometric([a1,be],[2*be],4*z0/(1+z0)^2));
sahen-uhen;
```

Proof. $F(\alpha, \beta, \gamma; z)$ は超幾何微分方程式 (the hypergeometric differential equation)

$$z(1-z)\frac{d^2}{dz^2}f(z) + (\gamma - (\alpha + \beta + 1)z)\frac{d}{dz}f(z) - \alpha\beta f(z) = 0$$

をみます. この微分方程式を用いて, 両辺が同じ微分方程式をみたし, $z = 0$ での両辺の値が一致することで証明できる. \square

Theorem 1 の証明.

不変原理より

$$\frac{x}{F\left(\frac{1}{2}, \frac{1}{2}, 1; 1 - \frac{x^2}{x^2}\right)} = x,$$

$$\frac{x}{F\left(\frac{1}{2}, \frac{1}{2}, 1; 1 - \frac{y^2}{x^2}\right)} = \frac{\frac{x+y}{2}}{F\left(\frac{1}{2}, \frac{1}{2}, 1; 1 - \frac{\sqrt{xy}^2}{\left(\frac{x+y}{2}\right)^2}\right)}$$

をみたすことを示せばよい.

上の式は $F(\alpha, \beta, \gamma; 0) = 1$ より, 下の式は 2 次変換公式に $\alpha = \beta = \frac{1}{2}$ とした公式よりわかる. \square

不変原理の応用

正数 x, y に対して,

$$m_3(x, y) = \left(\frac{\frac{1}{x} + \frac{1}{y}}{2} \right)^{-1} = \frac{2xy}{x+y}$$

を x, y の調和平均 (the harmonic mean of x, y) という.

$$m_2(x, y)^2 - m_3(x, y)^2 = xy - \frac{4x^2y^2}{(x+y)^2} = \frac{xy(x-y)^2}{(x+y)^2} \geq 0$$

より,

$$m_1(x, y) \geq m_2(x, y) \geq m_3(x, y) > 0.$$

数列 $\{x_n\}, \{y_n\}$ を初項 $x_0 = x, y_0 = y$ を正数で与え, 漸化式

$$x_{n+1} = m_1(x_n, y_n), \quad y_{n+1} = m_3(x_n, y_n)$$

で定める. $n \rightarrow \infty$ のとき, $\{x_n\}, \{y_n\}$ は同じに収束する. その極限値を x, y の算術調和平均 (the arithmetic-harmonic mean of x, y) といい, $\text{ahm}(x, y)$ で表す.

Theorem 4

$$\text{ahm}(x, y) = m_2(x, y) = \sqrt{xy}.$$

Proof. $m_2(x, x) = \sqrt{x \cdot x} = x$ と

$$\sqrt{m_1(x, y) \cdot m_3(x, y)} = \sqrt{\frac{2xy}{x+y} \cdot \frac{x+y}{2}} = \sqrt{xy},$$

より, 不変原理より $\text{ahm}(x, y) = \sqrt{xy}$. □

```
m3(x, y) := 2*x*y / (x+y);  
ahm(x, y) := block([i, xx, yy], array(xx, 10), array(yy, 10),  
xx[0]:x, yy[0]:y,  
for i from 0 thru 9 do (xx[i+1]:bfloat(m1(xx[i], yy[i])),  
yy[i+1]:bfloat(m3(xx[i], yy[i])),  
print(i, xx[i], yy[i], xx[i]-yy[i])),  
return(xx[10]));
```

```
ahm(3, 1); bfloat(m2(3, 1));
```

新しい2つの平均 m_4, m_5 を以下で定め,

$$m_4(x, y) = \sqrt{\frac{x+y}{2} \cdot x}, \quad m_5(x, y) = \sqrt{\frac{x+y}{2} \cdot y}$$

$\{x_n\}, \{y_n\}$ の初項を正数 $x_0 = x, y_0 = y$ で与え, 以下の漸化式で定める:

$$x_{n+1} = m_4(x_n, y_n), \quad y_{n+1} = m_5(x_n, y_n).$$

Theorem 5 (Carlson [10], 1971年)

$$\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \lim_{n \rightarrow \infty} y_n = \sqrt{\frac{x^2 - y^2}{2 \log(x/y)}}.$$

Proof. $\mu(x, y) = \frac{x^2 - y^2}{2 \log(x/y)}$ とおき, 不変原理で必要になる等式

$$\mu(x, x) = x, \quad \mu(m_4(x, y), m_5(x, y)) = \mu(x, y)$$

を Maxima で証明してみよう.


```
m4(x,y):=sqrt((x+y)*x/2); m5(x,y):=sqrt((x+y)*y/2);  
Cm(x,y):=sqrt((x^2-y^2)/(2*(log(x/y))));  
limit(Cm(x,y),y,x);  
factor(expand(Cm(m4(x,y),m5(x,y))/Cm(x,y))^2);
```

完全に等式を簡略化してくれていないが、必要な等式が得られた。

□

```
cm(x,y):=block([i,xx,yy],array(xx,50),array(yy,50),  
xx[0]:x,yy[0]:y,  
for i from 0 thru 49 do (xx[i+1]:bfloat(m4(xx[i],yy[i])),  
yy[i+1]:bfloat(m5(xx[i],yy[i])),  
if i<10 then print(i,xx[i],yy[i],xx[i]-yy[i])),  
return(xx[50]));
```

```
cm(2,1);  
bfloat(Cm(2,1));
```

平均の反復操作は、いつでも収束が早いわけではない。

円周率 π の算術幾何平均による数値計算

$\{x_n\}$, $\{y_n\}$ を初項 $x_0 = \sqrt{2}$, $y_0 = 1$, 漸化式 $x_{n+1} = m_1(x_n, y_n)$, $y_{n+1} = m_2(x_n, y_n)$ により定義された数列とする. 数列 $\{z_n\}$ を

$$z_n = \sqrt{x_n^2 - y_n^2} \quad \left(= \frac{x_{n-1} - y_{n-1}}{2} \quad (n \geq 1) \right)$$

で定める. z_n は急速に 0 へ収束する.

Theorem 6 (文献 [8], 6.2 節)

$$\pi = \frac{\text{agm}(\sqrt{2}, 1)^2}{1 - \sum_{n=0}^{\infty} 2^{n-1} z_n^2}.$$

この定理が π の数値計算に有効であることを 1976 年に Brent B.C. と Salamin E. が指摘している. この原理, つまり 数列 $\frac{x_{n+1}^2}{1 - \sum_{i=0}^n 2^{i-1} z_i^2}$ を用いて, 1982 年に金田, 吉野, 田村 は π を 16,000,000 桁まで計算して, 当時の π の近似計算世界記録を樹立している.

```
array(xx,10); array(yy,10);  
xx[0]:sqrt(2); yy[0]:1; ww:1/2;  
for i from 0 thru 9 do  
(xx[i+1]:bfloat(m1(xx[i],yy[i])),  
  yy[i+1]:bfloat(m2(xx[i],yy[i])),  
  ww:ww-2^(i)*bfloat(xx[i+1]^2-yy[i+1]^2),  
  print(i+1,bfloat(xx[i+1]^2/ww),bfloat(%pi-xx[i+1]^2/ww)));
```

不変原理は, m 項の m 個の平均に対しても有効である.

3 項の 3 平均 M_1, M_2, M_3 を以下で定める.

$$M_1(x, y, z) = \frac{x + y + z}{3},$$
$$M_2(x, y, z) = \frac{yz + zx + xy}{x + y + z},$$
$$M_3(x, y, z) = \frac{3xyz}{yz + zx + xy}.$$

$\{x_n\}, \{y_n\}, \{z_n\}$ の初項を正数 $x_0 = x, y_0 = y, z_0 = z$ で与え, 一般項は以下の漸化式で定める:

$$x_{n+1} = M_1(x_n, y_n, z_n),$$
$$y_{n+1} = M_2(x_n, y_n, z_n),$$
$$z_{n+1} = M_3(x_n, y_n, z_n).$$

Theorem 7 $\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \lim_{n \rightarrow \infty} y_n = \lim_{n \rightarrow \infty} z_n = \sqrt[3]{xyz}.$

Proof. 不変原理の等式 $\sqrt[3]{x \cdot x \cdot x} = x$,

$$\begin{aligned} & \sqrt[3]{M_1(x, y, z)M_2(x, y, z)M_3(x, y, z)} \\ &= \sqrt[3]{\frac{x + y + z}{3} \cdot \frac{yz + zx + xy}{x + y + z} \cdot \frac{3xyz}{yz + zx + xy}} = \sqrt[3]{xyz} \end{aligned}$$

をみたしているで、極限公式が得られる。 □

```
M1(x,y,z):=(x+y+z)/3; M2(x,y,z):=(y*z+z*x+x*y)/(x+y+z);
M3(x,y,z):=3*x*y*z/(y*z+z*x+x*y);
ahm3(x,y,z):=block([i,xx,yy,zz],array(xx,10),array(yy,10),
array(zz,10),xx[0]:x,yy[0]:y,zz[0]:z,
for i from 0 thru 9 do (xx[i+1]:bfloat(M1(xx[i],yy[i],zz[i])),
yy[i+1]:bfloat(M2(xx[i],yy[i],zz[i])),
zz[i+1]:bfloat(M3(xx[i],yy[i],zz[i])),
print(i,xx[i],yy[i],zz[i],xx[i]-zz[i])), return(xx[10]));
ahm3(2,1,1); bfloat(2^(1/3));
```

収束が早く 3 乗根を効率よく計算するアルゴリズムを与える。

算術幾何平均に関する研究史その3:

C.W. Borchardt は 1876年の論文 [9] において, 4項の4種平均

$$m_1(x) = \frac{x + y + z + w}{4}, \quad m_2(x) = \frac{\sqrt{xy} + \sqrt{zw}}{2},$$
$$m_3(x) = \frac{\sqrt{xz} + \sqrt{yw}}{2}, \quad m_4(x) = \frac{\sqrt{xw} + \sqrt{yz}}{2},$$

を用いて, $\{x_n\}$, $\{y_n\}$, $\{z_n\}$, $\{w_n\}$ を初項を正数 $x_0 = x$, $y_0 = y$, $z_0 = z$, $w_0 = w$ で与え, 漸化式

$$x_{n+1} = m_1(x_n, y_n, z_n, w_n), \quad y_{n+1} = m_2(x_n, y_n, z_n, w_n),$$
$$z_{n+1} = m_3(x_n, y_n, z_n, w_n), \quad w_{n+1} = m_4(x_n, y_n, z_n, w_n),$$

により定め, 極限

$$\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \lim_{n \rightarrow \infty} y_n = \lim_{n \rightarrow \infty} z_n = \lim_{n \rightarrow \infty} w_n$$

の表示式を与えた. その表示は, 原始関数が初等関数で表示できない広義積分を成分とする 2×2 行列の行列式となっている. 残念ながら Maxima では, その数値計算は容易にはできない.

4項の4種平均を算術平均は残して、残りの3つを4項を2項ごとに分けて、2項ごと算術平均とその結果に対する幾何平均で定義する。つまり、

$$m_1(x) = \frac{x + y + z + w}{4}, \quad m_2(x) = \frac{\sqrt{(x + w)(y + z)}}{2},$$
$$m_3(x) = \frac{\sqrt{(x + z)(y + w)}}{2}, \quad m_4(x) = \frac{\sqrt{(x + y)(z + w)}}{2},$$

で定める。これらを用いて、4種の数列 $\{x_n\}$, $\{y_n\}$, $\{z_n\}$, $\{w_n\}$ を初項を正数 $x_0 = x$, $y_0 = y$, $z_0 = z$, $w_0 = w$ で与え、漸化式

$$x_{n+1} = m_1(x_n, y_n, z_n, w_n), \quad y_{n+1} = m_2(x_n, y_n, z_n, w_n),$$
$$z_{n+1} = m_3(x_n, y_n, z_n, w_n), \quad w_{n+1} = m_4(x_n, y_n, z_n, w_n),$$

により定める。極限

$$\lim_{n \rightarrow \infty} x_n = \lim_{n \rightarrow \infty} y_n = \lim_{n \rightarrow \infty} z_n = \lim_{n \rightarrow \infty} w_n = \text{agm}_4(x, y, z, w)$$

の表示公式を与えた。

3変数の超幾何級数 Lauricella's F_D は

$$F_D(\alpha, \beta_1, \beta_2, \beta_3, \gamma; z_1, z_2, z_3) = \sum_{n_1, n_2, n_3=0}^{\infty} \frac{(\alpha, n_1 + n_2 + n_3)(\beta_1, n_1)(\beta_2, n_2)(\beta_3, n_3)}{(\gamma, n_1 + n_2 + n_3)n_1!n_2!n_3!} z_1^{n_1} z_2^{n_2} z_3^{n_3}$$

で定義される.

Theorem 8 ([12])

$$\text{agm}_4(x, y, z, w) = \frac{x}{F_D\left(\frac{1}{4}, \frac{1}{4}, \frac{1}{4}, \frac{1}{4}, 1; 1 - \frac{y^2}{x^2}, 1 - \frac{z^2}{x^2}, 1 - \frac{w^2}{x^2}\right)^2}$$


```

M1(x,y,z,w):=(x+y+z+w)/4;
M2(x,y,z,w):=sqrt((x+w)*(y+z))/2;
M3(x,y,z,w):=sqrt((x+z)*(y+w))/2;
M4(x,y,z,w):=sqrt((x+y)*(z+w))/2;
agm4(x,y,z,w):=block([aa,bb,cc,dd,i],
array(aa,10), array(bb,10), array(cc,10), array(dd,10),
aa[0]:x, bb[0]:y, cc[0]:z, dd[0]:w,
for i from 0 thru 9 do
(aa[i+1]:float(M1(aa[i],bb[i],cc[i],dd[i])),
bb[i+1]:float(M2(aa[i],bb[i],cc[i],dd[i])),
cc[i+1]:float(M3(aa[i],bb[i],cc[i],dd[i])),
dd[i+1]:float(M4(aa[i],bb[i],cc[i],dd[i])),
print(i,aa[i],bb[i],cc[i],dd[i])),
return(bb[10]));

```

```

PH(x,y):=prod((x+i),i,0,y-1);
PW(x,y):=if x=0 and y=0 then 1 else x^y;
F_D(x,y,z):=1+
float(sum(sum(sum(PH(1/4,n)
*PH(1/4,i1)*PH(1/4,i2)*PH(1/4,n-i1-i2)
/(n!*i1!*i2!*(n-i1-i2)!)*PW(x,i1)*PW(y,i2)*PW(z,n-i1-i2),
i1,0,n-i2),i2,0,n),n,1,30));
Agm4(x,y,z,w):=x/F_D(1-y^2/x^2,1-z^2/x^2,1-w^2/x^2)^2;

```

$x_0:4; y_0:3; z_0:2; w_0:1;$

$\text{agm4}(x_0, y_0, z_0, w_0);$

$\text{Agm4}(x_0, y_0, z_0, w_0);$

$\text{Agm4}(\text{M1}(x_0, y_0, z_0, w_0), \text{M2}(x_0, y_0, z_0, w_0),$

$\text{M3}(x_0, y_0, z_0, w_0), \text{M4}(x_0, y_0, z_0, w_0));$

$x_0:7; y_0:5; z_0:3; w_0:2;$

$\text{agm4}(x_0, y_0, z_0, w_0);$

$\text{Agm4}(x_0, y_0, z_0, w_0);$

$\text{Agm4}(\text{M1}(x_0, y_0, z_0, w_0), \text{M2}(x_0, y_0, z_0, w_0),$

$\text{M3}(x_0, y_0, z_0, w_0), \text{M4}(x_0, y_0, z_0, w_0));$

References

- [1] 上見練太郎, 勝股脩, 加藤重雄, 久保田幸次, 神保秀一, 山口佳三 共著, 微分 改訂版, 共立出版, 東京, 2014.
- [2] 上見練太郎, 勝股脩, 加藤重雄, 久保田幸次, 神保秀一, 山口佳三 共著, 積分 改訂版, 共立出版, 東京, 2014.
- [3] 泉屋周一, 石川剛郎, 陳蒞剛, 上見練太郎, 三波篤郎, 西森敏之 共著, 行列と連立一次方程式, 共立出版, 東京, 1996.
- [4] 泉屋周一, 石川剛郎, 陳蒞剛, 上見練太郎, 三波篤郎, 西森敏之 共著, 線形写像と固有値, 共立出版, 東京, 1996.

- [5] 三宅 敏恒 著,
入門線形代数, 培風館, 東京, 1991.
- [6] 三宅 敏恒 著,
入門微分積分, 培風館, 東京, 1992.
- [7] 高木 貞治 著,
近世数学史談, 共立出版, 東京, 1987.
- [8] 梅村 浩 著,
楯円関数論, 東京大学出版会, 東京, 2000.

- [9] Borchardt C.W., Über das arithmetisch-geometrische Mittel aus vier Elementen, Berl. Monatsber, **53** (1876), 611-621.
- [10] Carlson B.C., Algorithms involving arithmetic and geometric means, MAA Monthly, 78(5) (1971), 496-505.
- [11] Gauss C.F. 日記, Gauss 全集第X卷 1, 485–574, Georg Olms Verlag, Hilchesheim-New York, 1981.
- [12] Kato T. and Matsumoto K., The common limit of a quadruple sequence and the hypergeometric function F_D of three variables, Nagoya Math. J. **195** (2009), 113–124.